

図書館司書という
仕事

久保 輝巳著

戦後改革の一環として、図書館は国民教化の役所から住民へのサービス機関へと変容した。しかしこの「サービス」についての政府および世間一般の理解は、必ずしも不足しているように見える。この本は、ベリカン社が発行している、「職業人の真のあり方を追求」することをめざした「仕事シリーズ」の一冊であり、したがって図書館の専門職員すなわち司書、およびその卵を讀者に想定しているが、本の世界に関心のある人びとの図書館に対する認識を深めるのに有用の書である。

著者は公共図書館で働いた経験をもつ、図書館学担当の大学教授。自分の体験をふまえて現場の司書たちの協力を得て、司書の仕事の内容、社会的役割、職業人としての心がまえ、司書制度の現状と課題について、工夫をこらしてわかりやすく説明している。

著者が強調するのは、図書館は住民の知的自由を守り、学習権を保障する機関だということである。そのために図書館は資料の収集と提供の自由をもち、利用者の秘密を守り、一切の検閲に反対せねばならない。司書はこの自覚の上に、その他の資料に通じ、利用者の要求を知り、利用者と資料とを効果的に結びつけねばならない。その職務をこなすには専門教育だけでなく、多年の経験と自己研修が必要である。

発告政策文化しい貧

ところが、驚いたことには、わが国では司書制度が確立してないという。館長はじめ司書資格をもたぬ館員があまりにも多く、他の行政機関へ配転されやすい。専門職としての独自の昇進の道もほとんど閉ざされている。事情は学校図書館でも同様で、中学や小学校では法に定められている司書教諭を置くところがほとんどないという。ちなみに私の知るところでは、ロンドン大学の場合、各部門の主任司書が取書の決定権をもち、身分も教員待遇であつたが、日本ではその例を聞かない。

司書の軽視は図書館そのものの軽視である。イギリスとアメリカでは人口四十人につき、ソ連では二十人につき公共図書館は一つあるのに、日本では七万三千人に一館という。本書は控えめに事実を語るだけであるが、それだけに識字率の高さを誇る経済大国日本における文化水準の低さ、文化政策の貧困さを鋭く告発するものとなっている。子供

の活字はなれやいじめを喚く前に、本と親しい環境をつくることを必要ではなからうか。

（ベリカン社・一、五〇〇）
松尾 尊究

◇くぼ・てるみ 一九二八年
宮崎県生まれ。慶大文学部卒。
宮崎県立図書館整理課長、逗子市立図書館長を経て関東学院大教授、同大図書館長。